



親く、祖母と孫という長寿命の人類ならではの関係性が子孫繁栄に寄与しているのではないかという仮説も興味深い報告でした。



宮城大学 食産業学部
教授 森本素子氏

森本氏の発表では、人間を構成する 60 兆個という細胞のひとつひとつが、変化に対応するということを前提とした構造を持っており、わずか 4 日で入れ替わる小腸の絨毛をはじめとして、私たちの身体は変化を受容しながら日々新しく生まれ変わっている姿が紹介されました。

こうした生物としての柔軟性を東日本大震災での自らの被災経験に重ねあわせ、変化を受け入れながら互いに補完する社会、そしてそれまで考えもしなかった新しい経路での自己を形成し、外からの圧力をテコにして生き残っていくとする生命の力強さが語られました。

いずれの発表も、それぞれの観点から「変化に対応する」ことの重要性が語られていたように思います。この基調シンポジウムのはじめに、座長の位田氏によって語られた、「元に戻すという『復興』という観点から、新しい自分、新しい社会の始まりという観点への変換」が重要であり、人と動物と自然のバランスを保ちつつ生きるという言葉が、今の時代を生きる私たちの未来を象徴しているように感じました。



ポスターセッション

7月19日・20日 / 1F エントランス・ホール



ICAC KOBE 2015 の会場となる神戸大学総合研究拠点、学際研究推進体制を人文・社会学系を含めた全学規模に拡げ、大学の研究成果を集積することを目的に設置された施設で。この会議では、メインホールの他にラウンジ、セミナー室を使用して、同時に3ヶ所でシンポジウムとセッションが開催されました。

また、1階のエントランスはコミュニケーションルームとして開放され、シンポジウムや各セッションの合間の時間などに多くの来場者が訪れる場所となりました。国内外から参加した 14 組のポスターセッションが開催され、来場者との

積極的な交流の場となりました。審査員となる事務局アドバイザーが発表者から説明を受けたりしながら審査を行ない、翌日の閉会式でアワードが発表されることになっています。

シンポジウム 1

「同行避難～これからの人と動物の緊急災害時」

7月19日 14:30～17:30 / コンベンションホール



杉原未規夫氏

阪神・淡路大震災で大きな課題となった動物との同行避難ですが、その後の中越大震災、東日本大震災などの災害を例に、兵庫県、新潟県、静岡県等の行政の担当者と、都市の安全計画の専門家、そして、災害時に現場で救助・復興のアドバイスを行なった専門家によって集中的に議論が行なわれました。



寺井克哉氏

複数の災害事例を持ち寄り、多角的に議論を行なう機会はそれほど多くありません。これらの発表の中から垣間見えるのは、災害が発生した地域によって対応や必要とされている支援の内容が違うということです。



遠山 潤氏

兵庫県動物愛護センターの杉原氏からは、阪神・淡路大震災当時のスライドを紹介しつつ、どのような被害の中で動物の救護活動が行われたのかが報告されました。当時集まった義援金の残金は、緊急災害時動物救護本部へと引き継がれ、今後の国内での災害時の動物救護初期経費として活用されることになりました。活動を通して実際に経験した、初動時の経費不足に苦慮したことが今後に活かされた事例です。



大西 一嘉氏

静岡県健康福祉部の動物愛護班・寺井氏は、東日本大震災での経験を踏まえ、「動物愛護」「被災者の心のケア」「人への危害防止」の観点から同行避難の必要性を示されました。同時に多くの人が被害に遭う災害では、基本的には避難所での飼育管理は飼い主の責任となりますが、飼い主そのものが被害を受けている中で、如何にその責任を全うしても



山口千津子氏

らえる仕組みを地域の中で作っていくのが、今後の行政の大きな課題となっています。